

教師の 腕前診断

文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県公立学校講師)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

隣の荒れたクラスに どう関わるか

4月、子どもたちは着席して授業を受けていました。おしゃべりをしている友達には「授業中だよ」と注意していました。掃除や給食のお代わりの仕方でも新しい担任の方法を受け入れていました。

ところが、5月になるとクラスが落ち着かなくなり、朝の会が始まってからもランドセルが机の上にあります。発表している友達を「はあ〜!? 何言ってるの!?!」と侮蔑します。

困った担任がクラスの実態を伝えると、同僚が様子を見て教室に来てくれます。その時は平穏な教室なのですが、同僚が帰ると騒然さが戻ります。

今回のテーマは「隣の荒れたクラスにどう関わるか」です。

授業中に助けを求められる

授業中、隣のクラスの担任が教室に駆け込んできました。「子どもたちが言うことを聞きません。何とかしてください」と訴えます。

頼られた同僚の先生は自分のクラスの子どもに課題を出して、一緒に隣のクラスに行ってみました。立ち歩いている子どもが数名いますが、大方は漢字ドリルの続きをやっています。

Q

同僚の先生は最初に
誰に注目しますか。

- ① 問題行動を起こしている子ども
- ② 席について課題に取り組んでいる子ども

普通は、①に目が行くでしょう。学年会や放課後に問題行動を起こしている子どもの名前を聞いているので、「またあの子たちだろう」と予想しながらクラスのドアを開けます。果たしてその通りです。

立ち歩いている子どもに対して言葉を発します。諭すのではなく、叱責となります。授業中に立ち歩き、担任を困らせるのですから、叱られるのは当然です。だからこそ、強い指導になります。

「お前ら、何やってんだ。今は授業中だろう。ちゃんと席について勉強しろよ」と同僚の声は大きく、荒くなります。子どもたちは席に着きますが、ドリルに取り組んでいた子どもたちも姿勢を直し、重苦しい雰囲気です。

確かに教室は静寂を取り戻しました。しかし、それは威圧的な指導によるものです。問題行動を起こした子どもたちは反省したわけではありません。それどころか担任のことをさらに軽んじます。自分では解決できず、同僚の力を借りる担任を甘く見ます。

また、ドリルをしていた子どもたちも、「この担任ではダメだ」と見限ります。問題行動を起こす子どもたちが行動を改めることも期待しなくなり、クラスへの所属感が薄れ「早く一年が終わらないかな」と虚しい日々を過ごすこととなります。「物言わぬ」良い子たちの醒めた雰囲気がクラスを覆います。

同僚に助けを求めたこの日、担任は、担任としての力量の無さを子どもたちに知らしめ、見放される日となったのです。

それだけではありません。正論を発した同僚に、子どもたちは「怖い」というイメージをもちます。



「来年のクラス替えでは担任になって欲しくないなあ」と憂鬱になります。休み時間には「怖いね」とヒソヒソ話をします。隣のクラスの友達には、「いつもあんな感じなの。大変だね」と同情します。子どもたちは帰宅すると保護者に今日のことを話します。我が子の話を聞いた保護者は「隣の担任は言葉遣いが悪くて、怖い」と刷り込まれます。こういう噂ほどSNSで拡散します。

「ちゃんとした子ども」の存在に目を向ける

私なら、②の子どもたちに注目します。教師が気になる子どもは一部でしかありません。大方はちゃんとしている「気にならない子ども」、当たり前前ことを当たり前前している子ども、問題が無い子どもです。

彼らは「隣のクラスの先生は叱るために教室に来た」と思っているのです。まさか自分たちが話しかけられるとは思っていません。

教師はとにかく子どもを指導しよう、変えよ

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。
ベテラン先生によるケーススタディです。
こんな時、あなたならどうしますか？

うとします。結果、プラスよりもマイナスが目
が向きがちです。そうではなく、今の良い状態
を維持する、当たり前の良さに目を向けるべき
です。

一方、問題行動を起こしている子どもたちは、
自分たちが叱られることは察知しています。で
すから、なかにはふてぶてしい態度を取る子ど
ももいます。柳に風、暖簾に腕押し、糠に釘です。
それを見て、同僚の「注意」は「叱責」に変わり、
やがて怒ることになります。

さて、課題に取り組んでいる子どもたちに、
同僚はどんな話をしたらよいでしょうか。
それは不満を口に出させることです。ウィニ
コットは「攻撃的な感情が多少でも受け入れら
れ形で表出された時に、そのような感情に耐え
られる環境が子どもを感じる良い環境」であると
言います。言いたいことではなく、言うべきこ
とを言える環境を用意します。

子どもたちにかける言葉は

「ちゃんと漢字ドリルをやっていた人は立って
ごらん」と促します。動きに変化をつけること
で、これから起こることへの心の準備ができま
す。子どもは「悪いことはしていかないのに、ど
うして立たされるのだろう」と思考を巡らします。
「隣のクラスの先生はあの子たちを叱るためにこ
の教室に来たのに、ちゃんとやっている私たち
に何の話をするのか。」「何で注意をしないんだ。
何で担任を助けないんだ」って叱るのかな」と
不安な気持ちになります。

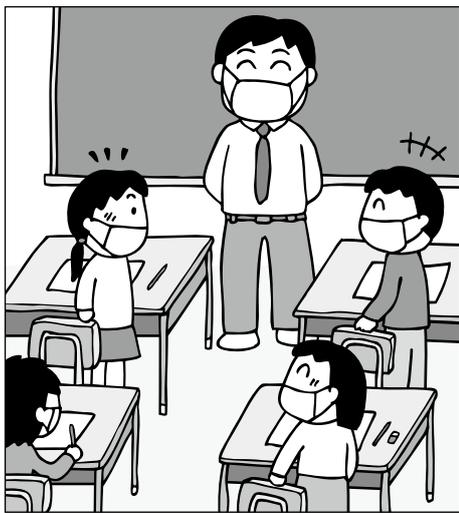
もちろん、立たない子どももいます。それも
よしとします。

起立させる効果はそれだけではありません。

大方の子どもが立つことよって、立ち歩いて
いた子どもが「注目」されなくなります。また、
「あれ？ 叱りにきたのではないの」という怪訝
そうな顔で自席に戻ります。

「立っている人たちはちゃんと勉強していたよ
ね。ちゃんとやることは当たり前だけど、それ
が難しいんだよね。君たちは勉強をしたいんだ
よね」と行動を認めます。子どもたちは、この
先生は叱るために来たのではなく、このクラス
の良さを見つけて来てくれたのだと気づきます。
すると、「立たされている」のは、実は「ほめら
れているからだ」と気づき、誇らしくなります。

立ち歩いている友だちがいても、自分がやる
べきことをやるということは、それだけ周りに
目を向ける余裕が無いということです。問題行
動に対して注意ができない、関心を示さない
というのは、クラスという共同体に対する諦め
でもあります。子どもたちは、できれば、平穏な
クラスで過ごしたいと思っっているはず。そ
の我慢した気持ちを出させます。不満を吐き出



させます。

「今のクラスはうるさくない、いいクラスだと
思っている人は着席してごらん」とゆつくりと
穏やかに話しかけます。クラスに満足してい
るかどうかを聞くのです。

本来は「不満がある人」と同僚は聞くべきな
のでしようが、それでは正直になれません。な
ぜならば、問題行動をする子どもの存在が気
なるからです。本当のことを言うした後で文句を
言われたり、いじめられたりされると警戒しま
す。本当は迷惑しているのです。辺りを見回すと、立っ
たまま、つまり、迷惑していると意思表示して
いる友達がいることで、意を強くします。

まさに、コフト心理学の「双子自己対象」で
す。「相手が自分によく似た存在だと思っことで、
ちよつとした一体感のようなものを感じ、安心
感をもつ」のです。

がまんしていた子どもたちは「私だけでない
みんなも同じ気持ちなのだ」と安心でき、それ
を吐露できる環境に安心感を得られます。

担任は授業を成立させたいと思っっているので、
どうしても立ち歩いている問題行動のほうに目
が行き、それを止めさせようとしています。目の前
で起こっていることに対処するのが精一杯です。
それに対して、同僚は第三者なので心の余裕
があります。クラスを俯瞰すると、課題に取り
組んでいる子どもにも気づきます。つまり、大局
を見ることができます。今よりも先を見据えた
対応ができます。

同僚がやるべきことは、クラスの荒れに注目
するのではなく、ちゃんとしている子どもたち
の素晴らしさを認め、クラスの荒れを軽減する
ことです。

(参考文献)※1「子どもはなぜあそぶの一統・ウィニコット博士の育児講義」猪股丈二、D.W.ウィニコット(著)星話書店 ※2「自信がなくても幸せになれる心理学」和田秀樹(著)PHP研究所